

現代ロシア女性文学におけるジェンダー理解とその可能性

2009年7月11日

新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」第二回全体集会

北海道大学スラブ研究センター 非常勤研究員 前田しほ

はじめに

ロシア文学は、近代の人間の自我の模索、思想・イデオロギーの探求、その成果を啓蒙するという点で、世界的に評価され、歴史に残る作品を残している。しかし、これらの功績は主に男性作家により、近代小説は男性のアイデンティティの形成を基盤としていたといってもよいだろう。

他方、革命前は読み書きすらままならなかった女性が、20世紀のソ連体制下で、高等教育を受け、社会に進出し、文化的に活躍している。現代ロシアの文学シーンも、女性作家の存在抜きには語るができない。ソ連時代は、女性が、啓蒙の対象から、作家としても、読者としても、ロシアの文学界を支える重要な担い手として成熟する過程とみなすべき。つまり、20世紀の女性文学・文化を研究することは、他者化されていた少数派が格下げされた自己イメージとどのように対峙し、いかに自己を位置づけ、自己表現していくかという近代の人間の自我の形成を追うことである。ソヴィエトでは資本主義社会とは異なる、ラディカルな女性の解放と平等主義が実施された。現在でもロシアだけでなく、旧ソ連諸国全般で女性の社会進出は高く、その職業意識、家族観、自己認識には、社会主義体制下で形成されたメンタリティやアイデンティティが色濃く反映している。

したがって、ジェンダー研究の観点から、ロシアばかりでなく旧ソ連諸国にとって、ソヴィエトという時代は重要であると考えられる（今回の発表題目はロシア女性文学としているが、広義のロシア語文学と理解されたい）。¹ またソ連型の近代化と女性政策に良し悪しの判断を下すのではなく、ひとつの構造体としてとらえることで、我々が学ぶことは多く、また我々自身の経験や研究を相対化するよい機会と思われる。

今回は、主に1970年代から80年代にかけて、いわばソ連文化の成熟期ともいえる時代の女性の文学作品・ディスコースを中心に扱う。1960～70年代の、いわゆる「停滞」の時代は、都市にますます人口が集中し、女性の全労働者に占める割合も約50%となる。関啓子によると、この時期に、高学歴、非身体労働のインテリ層が増加し、「新中間層」というべき階層が育つ。この新しい階層の発展と女性文学の充実は重なる。この中間層は、学歴インフレにより学歴に相応しい職業につけない、党組織に食い込まなければ自己実現できないことへの不満をもつ。権威主義的な公式イデオロギーに与することをよしとせず、価値観の多様性や個性を重視するといった特徴をもつ。しかし、人々は1930年代の「大テロ

¹ ベラルーシのロシア語作家スヴェトラナ・アレクシエーヴィチは「自分はロシア文化によって育てられ人格形成された。自分が関心をよせているのはソヴィエト人であり、自分がロシアの作家であるとかベラルーシの作家であるとかは言えない」と述べている（スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ（三浦みどり訳）『戦争は女の顔をしていない』群像社、2008年、383頁）

ル」の時代から、規律優先の行動様式を習得し、国家に面と向かって逆らわずにやりすくす生活スタイルを身につけてきた。精神的な自由は、信頼できる親しい間柄のなかだけで、政治的な揶揄をしたり、パロディを楽しむことで確保してきた。いかなる問題であれ、政治問題化することは避けられてきたという。² 女性問題も同様である。1979～80年にかけて、レニングラードの知識階級中心に、女性問題をテーマにした雑誌発行の運動が起きたが、反体制運動とみなされ、主要メンバーは国外追放された。³ こうした運動は展開することも、一般に知られることもなく、女性の問題を掘り下げて、精緻に理論化する動きもなかった。しかし、アカデミックな領域に先駆けて、文学作品の中で、女性は自分の経験や心のうちを語り、多くの読者に支持されている。

欧米のフェミニズム運動においても、例えば、エレヌ・シクスーの「女性のエクリチュール」、ドゥルシラ・コーネルの「イマジナリーな領域」の概念のように、女性の心的世界や経験を書くこと自体を、フェミニズムの重要な実践と位置付け、推奨する立場もある。その点では、ロシアがフェミニズム的に遅れているとみなす従来の研究姿勢は、一定の成果を挙げているものの、十分有機的に機能しているとはいえない。むしろ、ロシア女性のフェミニズム批判的ディスクールを検証することで、「西欧フェミニズム」に立脚した研究の問題点が見えてくることもある。

1. ロシア女性文学研究にあたって

1970年代欧米で登場したフェミニズム批評は、従来の文学や文学研究が男性中心の偏った傾向にあることを指摘し、女性の視点を提案することによって新しい可能性を広げた。その成果は90年代英語圏（特にアメリカ）のロシア文学研究にも波及している。ロシアでも第二次世界大戦以降女性の作家が増え、1980年代以降は、女性文学の存在ぬきに文学シーンを語るができないほど、女性による文学は質量ともにめざましい展開を見せている。そこで1990年代には、アメリカではフェミニズムの視座からのロシア女性文学研究が盛んになった。

我が国は、この分野の研究は出遅れているため、英語圏の研究成果を先行研究として参照することが多い。しかし、現地の事情を考慮しない、西欧フェミニズム理論の機械的援用も少なくないので、扱いには注意が必要である。日本にロシアの現代女性文学を先駆的に紹介・研究し、英語圏の研究成果の紹介という点で貢献している沼野恭子は、ロシア文学とフェミニズムは「微妙な関係」にあるという根本的な指摘をしている。⁴ というのも、

² 関啓子「民衆の生活世界と教育：ソヴィエト・ロシア教育史再考」『一橋論叢』114（3）、547-553。

³ タチャーナ・マモーノヴァ、ユリヤ・ヴォズネセンスカヤ（片岡みい子編訳）『女性とロシア』亜紀書房、1982年。

⁴ 沼野恭子「良妻賢母・他者・身体：ロシア文学とフェミニズムの微妙な関係」沼野『アヴァンギャルドな女たち：ロシアの女性文化』、五柳書院、2003年、67-86頁（初出1997年）。そのほか、ジェンダー研究の観点から、現代のロシア文学・文化を論じたものとして、以下があげられる。貝澤哉「ジェンダー研究におけるロシアの現在、または、ロシアにおけるジェンダー研究の現在：イリーナ・ジェレプキナ『熱情』、『ジェンダー的90年代』を読む」、『現代文芸研究のフロンティア第6号』、2004年、1-13頁。

女性作家による文学作品には、女性の過重労働や苦悩の実態を書くものが多く、西欧フェミニズムの観点からいえば、女性問題の告発と位置付けられる。例えば、ナターリヤ・バランスカヤの『ありふれた 1 週間』(1969 年)は、科学者でもある女性の、仕事をしながら、夫と子供の世話に明け暮れる多忙な 1 週間を描いた小説である。女性の作家たちは、女性には男性とは異なる独自の世界がある、女性固有の問題があると認識し、それら女性の世界や問題を書くことを重要な主題とみなしている。しかしながら、その同じ作家が、自分の作品にはフェミニズム的な目的はない、そもそもフェミニズムは女性らしさを無用に損なうものだ、ロシアにはフェミニズムは必要ないと主張する。このように、ロシアの一般女性も女性作家も口をそろえて、フェミニズムは女をいたずらに男性化するいかがわしいものであり、必要以上に男性を敵視していると批判する。中間層の女性にとって理想的な女性とは、職場で成功し、家庭を居心地良くしつらえ、しとやかに夫を立て、忍耐強く子供を養育し、身だしなみを整え、美しくあることである(もともと、こうしたスーパーウーマン像は現実とかけ離れている)。そしてロシア女性のフェミニズム観として、もっとも特徴的なのは、平等の思想を目の敵のように批判することである。例えば、「私たち女は男女平等の権利ゆえに苦しんでいる」「なまじっか解放されているから、女は異常で歪んだ生活を強いられるのです。女は男と同じように働かされますから」⁵ といった見解は、決して珍しくない。

こうした、一方で女性問題を告発しながら、他方で平等を敵視し、女性らしさを礼賛するロシア女性の態度の「矛盾」は、西欧のフェミニスト=研究者には理解できない。気になるのは、不可解とされた事象は十分検証されず、結局はフェミニズム意識の低さや後退現象が露呈したものと片づけられる傾向だ。これでは、ロシアの女性を、真の平等やフェミニズムが何たるかを知らない、教化すべき、啓蒙すべき対象とみなすことにならないか。格下げされた他者とみなすことで、フェミニズムが闘ってきたはずの、ステレオタイプな他者像の再生産に加担することにならないか。このような、ソ連あるいはロシアをフェミニズム的に遅れているとみなす態度は、大なり小なり欧米の先行研究に幅広く見られる。このことは、西欧フェミニズムが自身の西欧中心主義に無自覚であることを露呈しているように。

2. ロシアの「アンチフェミニズム」

ここでは一例として、欧米の研究者がロシアの女性・女性作家の発言を引用したものと、オリジナルの発言の趣旨を比較したい。

望月恒子「リュドミラ・ウリツカヤの作品世界：描写と人物の特徴を中心に」『スラヴ研究 53 号』、北海道大学スラヴ研究センター、2006 年、93-124 頁。前田しほ『『女性のエクリチュール』としての B. ナールビコワのテキスト：境界攪乱の戦略について』『スラヴ研究 54 号』、同上、2007 年、131-162 頁。

⁵ カローラ・ハンソン、カリン・リーデン編(大津典子訳)『モスクワの女たち』阿吽社、1988 年、15 頁。

例：ヘレーナ・ゴスチロの論文「家庭訓かペレストロイカか」⁶

「女性はまず自分の家族を愛し、大切にし、慈しむべきです」、「女は生まれつきかよわき性と運命付けられています…男性とは女性の最大の獲物です…家族のない女性は、主人をなくした迷子の動物のようなものです」、「西側の女性はいつも、どうして我が国では政府や当局のポストにつく女性が少ないのかと聞いてくる。こういうポストについた女性=暴君が大きな顔してはびこっていて、男性だろうと女性だろうと身近にいる人間を苦しみぬいているということを知らないのだ。…女性官僚は男性官僚よりも恐ろしい。男性官僚がまだ麗しき性に属するものに憐れみを覚えるのに対して、女性官僚は何者にも憐れみをもたない。…我が国の、カリカリして、気まぐれで、生活の重荷に追われる女性を気の毒に思う。しかし男性だってそれに劣らず気の毒である。昨今西側では死に物狂いで男性と闘うことが流行っている。我が国では今のところ見かけないが。ありがたいことだ。女性が参戦したりしたら、女性が勝つに決まっている。女性のほうがずるいし、陰険だし、辛抱強いからだ。私は男性が敗北した国に住みたいと思わない。」、「西側の女性フェミニストはサメのような歯をしている」

ゴスチロは、フェミニズム批評を援用して現代のロシア女性文学について優れた論考を発表しているアメリカの研究者である。論文「家庭訓かペレストロイカか」の冒頭で、ロシア女性のフェミニズム批判や女性のあり方についての意見を引用している。女性にとって家庭や家族を大事にすることが重要である、女性はいかに弱い存在なので男性に守られるべき存在である、権力を握った女性は、残酷で暴君となることが多い、女性の権利を主張するために男性と戦うべきではない、と西欧のフェミニズムへの批判発言で締めくくられる。総じて、ロシアの女性は、家父長的な男は仕事、女は家庭の紋切り型の男女関係から解放されていない、フェミニズム的に「遅れている」と印象づけられる。

では、オリジナルの発言は、実際はどのような趣旨だったのか。少し長くなるが、前後の文脈に注意を払いたい。二番目の発言は、人気女性作家ヴィクトリヤ・トーカレワに対し、カナダの研究者がインタビューを行ったものである。ゴスチロの抜粋では、女は女らしく、男は男らしくあるべきだ、家庭が女の幸せだといわんばかりだが、元の発言はそんなに単純ではない（ただし、このインタビューは英語で発表されているので、ロシア語のニュアンスが翻訳に反映していない可能性がある）。

ヴィクトリヤ・トーカレワのインタビュー⁷

インタビュアー：あなたはご自身を解放された女性だと思いますか。 / トーカレワ：そう

⁶ Helena Goscilo. "Domostroika or Perestroika? The Construction of Womanhood in Soviet Culture under Glasnost" in Thomas Lahusen, ed., *Late Soviet culture: from perestroika to novostroika* (London, 1993), p.233.

⁷ Sigrid McLaughlin. "An Interview with Viktoriya Tokareva", *Canadian Woman Studies* 10:4 (Winter 1989), pp. 75-76.

です、不幸にも。／インタビュアー：どうして不幸なんですか。／トーカレワ：解放には否定的な面がたくさんあるからです。／インタビュアー：あなたにとってそれはどのようなことですか。／トーカレワ：経済的自立です。これがほかのいろいろな自立を促します。／インタビュアー：それは、女性が労働できるようになれば、あらゆる問題が解決するといったマルクスは正しかったという意味ですか／トーカレワ：そうです、女性が金を稼ぐと、自由になります。／インタビュアー：ソ連の女性は、自分たちが平等だと感じているのでしょうか。／トーカレワ：ある女性たちは自己実現を家庭（夫、子供たち、アパート）に求めます。やり遂げようと思ったら、これも困難な大仕事です。この仕事では男性は精神的なパートナーとなりえます。また別の女性は公的な自己実現を好みます。どの女性も異なるのです。私の娘の夫は手伝おうとしません。娘が強ければ、彼は去るでしょう。そうなったらことです。／インタビュアー：ロシアのフェミニスト・コロンタイは知られていますか。／トーカレワ：はい。コロンタイは彼女の時代には必要でした。しかし現在、解放が家庭を破壊しています。女性は生まれつきかよわき性と運命付けられています。男性が面倒をみなくてははいけません。戦争がおきれば、男性が女子どもを守るでしょう。もちろん、男性の補助者と家政婦が女性の仕事に割り振られるのに聖書が決定的な役割を果たしています。女性が強いと、弱い男性が引き寄せられ、逆転してしまいます。男性とは女性の最大の獲物です。／インタビュアー：なぜあなたは解放ゆえに家庭が崩壊すると思うのですか。／トーカレワ：男性が背負うべき荷を女性が担うからです。女性が男性を責任から解放にすると、男性は損なわれ、女性は両性的になります。というのも、両方の性の特徴をもつからです。／インタビュアー：どうしてそれが解放と関係するのですか。どうしてただ単純に男性があきらめて責任を負わないというのではないのですか。／トーカレワ：社会的な根拠があります。イニシアティブが報われないのです。よい仕事をして、それに見合う報酬がないのに、どうしてよい仕事をすべきなのですか？私は一般化を好みません。いろいろな男性がいますから。消極的な人もいれば積極的な人もいる、悪い人もいれば善い人もいる。私は結婚して28年たちます。家族のいない人生なんて想像できません。家族のない女性は、主人をなくした迷子の動物のようなものです。その意味では私は家父長制的で、伝統的です。でも私は完璧な愛をいつも待っています。そのおかげで支えられているし、おしゃれをします。それに待ち望みます。そういうわけで、私は小説を書くのです…私の理想の男性を描くのです。私は忍耐強いのです。最近の女性たちは一般にあまり辛抱強くありません。でも辛抱強いのとそうでないのと、どっちが賢いのでしょうか。人生は一度きりです！（下線部はゴスチロによる引用箇所 —— 前田）

まず第一に、最初の波線に注目すると、トーカレワ自身は、自分が解放され、自立した女性であると自覚している。注意すべきなのは、「不幸にも」という但し書きが、決して女性解放の意義を否定しているのではないことだ。実際に、アレクサンドラ・コロンタイの功績を評価している。しかし、女性が自立し、平等が確立すると、職場でも家庭でも責

任を負うようになって強くなると、男性は家庭の仕事をせず、かといって職場では思うように活躍できない状況になる。そこで「男が背負うべき荷を女が担い、「女は男を責任から自由に」状況が、男性から、自尊心を養い、かつ男性性を確認しうる場を奪い、結果的に強い女と弱い男という逆転した現象が生じるという。つまり、女性は女らしく、男性は男らしくあるべきだという主張は、家父長制的男女関係や性別役割分業の肯定と単純に結びつくものではない。トーカレワは余裕たっぷりに自分の強さを実感しているし、男性が人生のパートナーとして物足りないことに失望している。その結果、創作には、自分の理想を反映した男性像を書くのだと告白している。また自己イメージに注意しても、仕事をこなすことは当たりまえであり、その上でよい家庭を築き、お洒落をするというスーパーウーマンを求めている。もちろん、作家の元発言が、自己犠牲的に家事を負担し、家族の世話をし、男性を甘やかしているという印象を与えることを否定するつもりはない。

またゴスチロフが三番目に引いた引用は、女性作家の中でも抜群に高い評価を得ているタチャーナ・トルスタヤのエッセイからの抜粋である。⁸ 沼野によれば、トルスタヤは名うての「反フェミニスト」として知られる。⁹ ここでも、解放された女性のマイナス・イメージをあげつらい、女性の社会進出を批判し、劣った性としているようだ。しかし、元発言を注意深く読むと、女性を専ら抑圧と搾取の犠牲者であるとみなすのは間違いだという、西欧のフェミニズムへの辛辣な批判となっている。トルスタヤの主張によると、一口で女性といってもいろいろな人がいて、同じソヴィエトの女性といっても、ステレオタイプで括ってしまうことはできない。女性の中にも不愉快で、残酷で、男であろうと女であろうと他人を迫害するものもいるし、そしてそういった好ましくない女性像を描いたり、研究することがまだ少ないのではないか、という。つまり、世界を男性と女性に分けて、男性を敵視することは、狭量な見方であり、それでは社会は改善されない、不毛な戦いであるということだ。

3. ロシアの「アンチフェミニズム」再検討

以上は、ほんの一例であるが、西欧フェミニズムのディスクール全般に、自分たちへの批判を黙殺するか、あるいは相手を反動と決め付けて、真面目に取りあげようとしない姿勢が強いことが指摘される。たとえば、ロシア女性がフェミニズムを批判すると、「アンチフェミニズム」と呼ばれる。このレッテル張りによって、批判の内容や意図、背景にある社会的文化的なプロセスは吟味されることなく、反動と決めつけられる。

これにより、ロシア女性の声は「フェミニズム」の議論の場から疎外され、社会的・歴史的に固有な背景や事情も十分な考慮がされない。しかしながら、資本主義諸国に比べ、遥かに広く平等が保障された旧社会主義諸国では、一定の社会活動が女性にも課せられてきた。その平等が条件付きだったことを考慮しても、ソ連社会では数十年に亘って、女性

⁸ *Толстая Т.* В стране побежденных мужчин// Московские Новости. 1989. №38. С.13.

⁹ 沼野、同上、68頁。

が社会的に解放され、自立していると感じる状況にあったことは重要である。なぜならば、たとえ形式的平等とはいえ、一定の平等が享受されていたからこそ、1960年代から西欧で盛んになる第二派フェミニズムのような平等要求運動はソ連では生じなかったし、必然性がなかったからである。その代わりに社会主義時代に徹底された平等が、西欧の資本主義世界の女性とは異なるメンタリティを育んだ。それと同時に、ロシア独自の問題を生み、結果的に女性に深い失望を与えることになった。例えば、女性が社会的労働に進出しても、家庭内労働は依然として女性が負担するケースが挙げられる。平等を形式的に終わらせず、実質を伴うものとするためには、こうしたロシア女性の失望は、経験を伴った貴重な証言として見ることができる。

さらにソ連政府は、婦人問題を階級闘争という政治的イデオロギーの問題に組みこんだ。一定の政策を実行し、解決が図られた結果、フェミニズムはそうした政策へ異議を唱える反政府運動とみなされた。同時に西側の女性運動の情報も遮断された。そのため、西側の資本主義諸国でフェミニズムが多様な展開を見せていることがロシアで知られるのは1990年代以降のことである。しかもアカデミックな領域に限られ、現在でも、一般的にロシアでは「フェミニズム」とは、創成期フェミニズム、つまり「婦人解放運動」を意味することを留意しなければならない。

このように、現地の歴史や事情を考慮せずに、西欧のフェミニズムの尺度を一方向的に押し付けるというスタイルは、評判が悪く、既に1980年代から批判されている。ポストコロニアル・フェミニズムは、第一世界の女性の自由や権利は第三世界の女性の搾取と抑圧の上に成り立っていると指摘し、自分たちのフェミニズムの優位性を押し付けて無自覚でいる、普遍性を過信していると批判している。¹⁰ また、アメリカ国内でも黒人女性から従来のフェミニズムは「白人中産階級」の特権維持が目的だという批判がでていいる。しかも新しい意見や批判を述べたり、フェミニズムへの根本的な問い直しを提案しようとする、白人主流派によって退けられ、沈黙されるとして、その排他性が鋭く批判されている。¹¹ ロシアの女性文学研究においても、同様な権力構造が指摘できる。

こうした批判を受けて、90年代に、「一部のフェミニストが『正しい』フェミニストたる適切な行動様式とは何かを宣言してしまったために、それに馴染まない人々に沈黙が押しつけられてしまった」ことを反省し、「すべての女が抑圧されている」から女性同士の連帯が可能であると考え、これは誤っているとする立場も現れた。¹² しかし、こうした考え方は芽生えたばかりで、当時はまだ同一性の幻想が広く信じられていた。統合後のドイツの女性問題を調査・分析した姫岡とし子によると、90年代にフェミニズムの東西対立が見ら

¹⁰ ガヤトリ・スピヴァク(上村忠男訳)『サルタンは語るができるか』みすず書房、1998年。スピヴァク(鈴木聡・大野雅子・鶴飼信光・片岡信訳)『文化としての他者』、紀伊國屋書店、2000年。レイ・チョウ(本橋哲也訳)『ディアスポラの知識人』青土社、1998年。岡真理『彼女の「正しい」名前とは何か：第三世界フェミニズムの思想』青土社、2000年。

¹¹ ベル・フックス(清水久美訳)『ブラック・フェミニストの主張：周縁から中心へ』勁草書房、1997年。

¹² ドゥルシラ・コーネル(仲正昌樹監訳)『正義の根源』お茶の水書房、2002年、27頁。

れたという。西の女性が東の「指南役」として、フェミニズムを教えてあげようという態度で接したことで、これに東の女性は反発したのだ。さらにこの対立には、フェミニズムのスタイルの違いがからむ。西の女性が、男性的価値や行動様式を疑問視し、女性主体の確立を重視するのに対して、東の女性は「女性の権利」ではなく「人間としての平等」や「職業と家庭の両立」を課題にする。さらに、東の女性については、社会主義時代の伝統を引いて、就業意識が強く、経済的な自立志向が格段に高いことや、家族や友人など親密な人間関係を大事にする伝統があげられている。¹³ 90年代ドイツにおける対立は、旧社会主義国と資本主義国のフェミニズムへの姿勢・考え方が最も先鋭的に衝突したケースとして考えられる。

実際、東ドイツの女性の特徴とされることは、ロシアの女性にも合致する。フェミニズムの枠内で、ロシア女性のフェミニズム批判を見直すことは、フェミニズムそのものの多様性と生産的な議論に貢献するはずである。例えば、女性の二重負担を訴える声は、経験に根ざした貴重な証言であり、実質を伴わない形式的平等がはらむ根本的な問題が見出される。また、自分に負担のしわ寄せがきていると感じても、ロシア女性は男性を敵視することはなく、協力関係を結ぶよう努力するべきだと考える。世界は男性と女性から成り立っているのだから、男性を一方向的に攻撃し、排除することはフェアでないというのだ。ここには、男性／女性の対立構造に則って、人生や生活を女性という属性のみから見る態度への懐疑が汲み取られる。

さて、ここで、ブルガリア出身のジュリア・クリステヴァの論考を参照したい。「差異のフェミニズム」として知られるクリステヴァの女性論は、男性並みの平等に則って、女性が権力に到達しても、権力の本質は変わらないのではないかという疑念から出発している。クリステヴァは女性を抑圧の犠牲者とみなすことは問題の解決にならないと考える。そこで、男女の差異の消滅や和解をめざすのではなく、その差異の構造そのものを見つめなおすという提案を行う。

[旧社会主義]諸国では、女性参政権論者や実存主義フェミニストの権利要求が大部分実現されたと言ってもそれほど誇張にはならないだろう。というのも、東欧諸国では創成期フェミニズムの主要な平等要求のうち、三つがすでに実行された（あるいは迷いや誤りがあるものの実行されつつある）ことは確かである。三つとは、経済上、政治上、職業上の平等である。四番目の妊娠中絶や避妊など（同性愛も含む）性関係の自由化をもたらす性的平等がまさに問題となり、そのせいで新世代の闘いにとってこの平等が本質的に見えるのである。しかし、同時に、この社会主義的実現の結果が失望となり、以後、闘いはもはや平等の探求でなく、差異や特性の探求の方へと向かっていく。¹⁴

¹³ 姫岡とし子「ドイツ統一十年とジェンダー」仲正正樹編訳『ヨーロッパ・ジェンダー研究の現在：ドイツ統一後のパラダイム転換』御茶の水書房、2001年、96-120頁。姫岡『統一ドイツと女たち：家族・労働・ネットワーク』時事通信社、1992年。

¹⁴ ジュリア・クリステヴァ「女の時間」棚沢直子・天野千穂子編訳『女の時間』勁草書房、1991年、115-152

旧共産圏では平等要求が女性の失望を呼び、性的差異や特性など探求する方向に関心がシフトしているというのだ。実際に、20世紀後半に華々しく展開したロシアの女性文学において、こうした失望はよく書き込まれている。これと並んで興味深いのは、クリステヴァが、社会主義の国では女性の平等は**ほぼ**実現したと述べていることだ。保留されているのは性的自由の問題である。女性文学では、性に関わる知識の隠蔽、予期せぬ妊娠、早婚、離婚、母子家庭、墮胎、避妊など性に関わる問題は重要なテーマである。

他方、アメリカのフェミニズム思想家ドゥルシラ・コーネルは、従来のフェミニズムは、職業の平等と機会を提供しようとしてきたが、「心の問題」を欠いてきたことが問題だという。それは社会主義国家においても同様で、生殖、すなわち再生産の枠組みの中で女性のセクシュアリティは厳格に管理されてきた。したがって、人がセクシュアルな意味で親密な人間関係を形成しようとする、そして豊かな心的領域をもとうとすることが、ブルジョワ的退廃として非難されたと指摘する。またコーネルは、形式的な平等が必ずしも人に幸福をもたらさないのは、「イマジナリーな領域」が欠如しているからだと考える。¹⁵ そこで彼女は、日常の生活や心の働きを創作に反映させることを重視する。

コーネルの「イマジナリーな領域」という概念に従うと、ロシア女性にとって、職場と家庭の公私の領域での苦悩や苦労を自己表現する場として、創作が機能していること、そしてこれが広義のフェミニズム運動の実践であることが見えてくる。望月恒子は、ソ連時代から女性作家の特徴として、「偉大な文学」からはこぼれおちた、家庭生活、個人的なこと、日常的なことに焦点をあげることが特徴だと指摘する。「徹底して私的生活だけを書き、作品を日常的ディテールで埋め尽くすウリツカヤは、そのこと〔風俗描写は大文学とは異なる次元に存在すること——前田〕を十分に意識しているように思われる。そのような作品を生産し続けることは、イデオロギーや社会性を重視して、身体性や個人性を軽視してきた文化・文学へのアンチテーゼになりうる。個人を描き、家庭を書くことによって、『大文学』の規範に挑戦できる」¹⁶。もともと、「女性文学」というターム自体が、侮蔑的なニュアンスを含む。さらにソ連の女性作家は、偉大な文学に疎外されたこと、日常的なこと、凡庸な現実の生活を題材としてきた。だからこそ、公的イデオロギーの制約を受けずに、なおかつ、政治的にたてつくことなく、自由な精神活動を維持するための領域として機能しえた。だからこそ、「大きな物語」崩壊後のロシアで、女性作家が培ってきたオルターナティブな文学と世界観は、多様化する「小さな物語」のヴァリエーションとして有機的に展開していると思われる。

また時代によっても、女性たちの仕事や家庭に対するメンタリティが異なっていくことが、参考資料に付した作品を概観するだけでも見えてくる。1940年代の後半、多くの女性

頁。

¹⁵ クリステヴァ、前掲書、8-10頁。

¹⁶ 望月恒子「リュドミラ・ウリツカヤの作品世界：描写と人物の特徴を中心に」『スラヴ研究 53号』、北海道大学スラヴ研究センター、2006年、109頁。

が前線に志願したが、そのときの動機は、女性も男性と同じことができる、男性と同じように扱われたい、自分も祖国を守りたい、といった男女平等の「理想」を語るものが少なくない。時代は下って、1970年代の女性たちは、仕事と家庭を両立させるスーパーウーマンを理想としながら、それができない自分を責めているのに対し、90年代の女性は、両立を放棄し、どちらかを選ぶか、あるいはどちらでもない性的自由の希求を選んでいる。また、家庭でも、父親の存在が希薄であり、娘と母親との確執が大きなテーマとなっている。男の子でも甘やかされ過保護に育ったり、あるいは暴君な母親の子供は、精神的に自立できず、飲酒におぼれたり、誰かに自己犠牲的に尽くすことでしか自己実現できない中途半端な人間となったりという物語も少なくない。

1970年ブロンフェンブロンナーが、ソ連の家庭の特徴とされる父親の不在と母親中心の構造を、戦争によって多くの男性が失われ、母親中心の家庭のモデルが社会全体に広がったためだという仮説をたてた。¹⁷そして、父親が不在の子供には母親が過保護になりがちであること、特にそうした環境で育った男の子は、最初は従順でおとなしくても、成長するにつれ所属する集団の性格に容易に染まり、それがギャング集団であれば、自分の場所を確保するために、たくましさや攻撃性を発揮していくことを指摘し、ソ連社会の家庭の在り方に危惧を示している。

考えてみれば、ロシアの男性には、過度にマッチョにこだわったり、ストレスや挫折によって容易に飲酒に走り、人生を踏み誤るという、女性とは異なる別の神話がある。そのほかにも、徴兵制度が大きなストレスになっていることが指摘される。ロシアはアフガニスタン戦争、チェチェン戦争、記憶に新しいところでは、グルジア侵攻など、常に戦争をしているため、徴兵されれば、前線に派遣され、戦死する可能性があり、生還しても、精神的に病む者は少なくない。若者は競って徴兵逃れを試み、そのストレスは計り知れない。本報告では、女性学の立場から、個人や家庭など私的な領域を書くことを得意としてきた女性文学を考えてきたが、今後は男性学の視野をとり入れることが、ジェンダー研究の発展にとっては不可欠であろう。

以上のように、ロシアの女性文学を考えることは、ソ連・ロシアを文化論的に考察する上でも、またフェミニズムやジェンダー研究の成果や意義について相対化するという意味でも、重要なアプローチではないかと考えられる。ロシアのフェミニズムは、確かに理論的な精緻さという点ではまだ遅れをとっているかもしれない。しかし、女性作家の作品や発言は、女性が不当に抑圧されている、家父長制の犠牲者であるという読み方が、多様な読みの可能性を切り捨て、貧弱な結論しかもたらさないことを見事に示している。

¹⁷ ユリエ・ブロンフェンブロンナー（長嶋貞夫）『二つの世界の子どもたち』、金子書房、1971年、91-94頁。

参考資料 I : 女性作家の作品概要

・ナターリヤ・バランスカヤ (1908-2004) 『ありふれた 1 週間』 (1969) ¹⁸

研究所に勤務しながら、家事と、夫と二人の子供の面倒を見る「幸せ」な 20 歳代の女性の 1 週間の生活を追うという設定。主人公は、精神的な美しさと容姿の美しさを備え、仕事も完璧、家事も完璧、母親としても忍耐強く、立派に子育てをするという理想の女性像をめざす。しかし、子供がいるため職場は頻繁に欠勤・遅刻するため、仕事で成功しているとは言いにくく、くたくたに疲れて家庭に帰っても、おなかをすかせた子供と、読書にふける夫に食事を作り、家事をするが、あまりに忙しく、疲れ果てて、つい子供に手を挙げてしまい、夫と口論になる。

→母としても、妻としても、労働者としても理想的なスーパーウーマンを内面化し、それに苦しんでいる。

・イ・グレーコワ (1907-2002) 『大学教師』 (1978) ¹⁹

モスクワの大学の教師・学生の日常生活を描いた作品。世界的に有名な数学者だった学科主任が亡くなったため、彼の研究を整理するが、学問的に何一つ生産していなかったことが判明する。その調査をした主人公 (元教え子の助教授ニーナ) は、自分の研究と合わせて成果をでっちあげる。また後任にきた教員が、厳格で、温かみがなく、学科の雰囲気悪くする。こういった大学内の人間模様のほか、プライベートでは彼女が、父親の異なる 2 人の子供と、亡くなった友人の子も引き取り、3 人を育てるシングルマザーであるが、家事が不得手のため、長男が弟たちの面倒をみている。長男に彼女ができると、弟たちは、結婚して独立されたら、誰が面倒を見てくれるんだと大騒ぎをする。他方、出来の良くない学生リューダは妊娠し、未婚の母として、子供を育てる。ルームメイトである秀才のアーシャもそれを手伝い、夏休みに自分の実家に連れて帰ると、孫と思いこんだ母親の病気がよくなったため、本当のことが言えなくなる。母の死後、老けこんだ父親ものために、アーシャは子供を連れ帰り、家族のように過ごす。こういった、大学の公的な空間だけでなく、寮、アパートでの個人生活を書くことで、平凡な日常生活や人々の心の機微が豊かに描かれる。嫌われ者の人物も、勤勉で熱心な働きぶりのほかに、妻に先立たれ、活気を失った家庭に遅く帰ると、娘や年老いた母親が待っている様子を伝えることで、同情を誘

¹⁸ ナターリヤ・バランスカヤ (高橋昌美訳) 白馬書房、1972 年。

¹⁹ イ・グレーコワ (前田勇訳) 『大学教師』、群像社、1988 年。

う。

→家父長制的な家族像は崩壊。父親は家庭から去るか、初めから家庭を持たず、影は薄い。しかし、血縁関係にある・なしにかかわりない、拡大家族を形成。赤ん坊を育てるアーシャとリュウダの2人の母親を、クラスメート、寮の管理人、2人の家族が支えている。ニーナ自身は、研究者としても、教育者としても多忙で、野心家であるが、恋人や、彼女を想う男性が複数存在し、プライベートなことに忙しい。ニーナの家庭では、ニーナが経済的な大黒柱ではあるが、精神的には長男がパートナー＝父親役を果たしている。

・ユリヤ・ヴォズネセンスカヤ（1940-）『女たちのデカメロン』（1985）²⁰

ロシアでは産後10日間、隔離される。ある大部屋に居合わせた11人の女性が、暇を持て余して順番に話をする。肉体労働者、国際線の客室乗務員、市議会委員、反体制活動家、音楽教師、浮浪者、研究者、舞台演出家など、様々な職業・立場の女性が、話を通じて、うちとけ、親しくなっていく。例えば、粗野で知性に欠けた浮浪者が実に心のやさしい人であり、息子の父親となる人がインテリで立派な人間であることから、自分は身を引こうとしている。派手で奔放な軽薄に見え、実際売春婦や金持ちの愛人をしていた女性が、子供の頃、美貌故に虐待を受け、不幸な生い立ちである。こちこちの共産党幹部が、手袋の紐で痴漢をこらしめた、夫の親友に恋をし、一晩だけ想いを遂げた、といったエピソードを披露することで、親しまれていく。ほかにも、ソ連の強制収容所の実態やソ連の女性を取り巻く諸問題（日常製品の不足、母親の年金、住宅不足など）が議論されている。

→作者はフェミニズムの活動家であるため、女性問題として意識的に取り上げている。男性が不在のため、女性同士で心置きなく、犯罪から日常レベルの多様なエピソード、多様な女性像・家族関係、セクシュアルな話題が赤裸々に語られる。

・スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ（1948-）『戦争は女の顔をしていない』（1985）²¹

第二次世界大戦時、ソ連の女性は「銃後」を担うだけでなく、医療・通信・飛行・狙撃、パルチザン活動等あらゆる分野に志願し、活躍した。女性兵士は100万人いたといわれる。しかし、戦後は差別され、ひっそり生きてきた。前線で活躍し、複数の勲章を受け、英雄として当時の紙面を飾った女性でも、白い目で見られ、特に戦地経験のない女性から侮辱されたという。アレクシエーヴィチはそうした「普通」の女性から戦争経験を聞き出し、証言集としてまとめた。例えば、料理係の女性の食事の面倒をみるという日常的な業務から、戦争の本当の恐ろしさが伝わってくる。「戦闘のあと誰も生き残っていないことがあったの。大釜一杯スープを作ったのに、誰も食べてくれる者がいないってことが」。

→作家の問題意識：戦争の物語は、「男の言葉」で語られ、男の戦争観、男の価値観にとらわれている。女は戦争を語らないし、たとえ語っても、男の規範に合わせて、他人が経験

²⁰ ユリヤ・ヴォズネセンスカヤ（法木綾子訳）『女たちのデカメロン』群像社1993年。

²¹ スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ（三浦みどり訳）『戦争は女の顔をしていない』群像社、2008年。

した戦争を語る。「女たちはかつて、男ばかりの世界で自分の地位を主張し、それを獲得したのに、なぜ自分の物語を守りきらなかったのだろうか？」

・リュドミーラ・ペトルシェフスカヤ（1953-）『時は夜』（1991）²²

老母を精神病院に入れ、孫息子の面倒を見ながらの貧しい年金生活と娘との壮絶な確執を書く50代の詩人アンナの手記。息子のアンドレイは刑務所で荒み、飲んだくれ、身障者となって、事あるごとにアンナに金をせびりに来る。娘のアリョーナは、アンナが面倒を見る長男のほかに2人も不義の子を生み、貧困に窮して母親のアパートに転がり込む。入院していた老母が遠くの施設に転院させられること、そのため今後母親の分の年金がもらえなくなることを知り、引き取るために外出するが、結局転院に同意し、手ぶらで帰る。しかし、娘は子供たちを連れて去り、部屋は空っぽだった。

→アンナ自身も未婚の家庭に育ち、母親との不毛な愛憎劇の中で育ったが、自分も不倫の末の2人の子供を育てた。高慢で暴君でエゴイスティックな女三代の愛憎劇は壮絶で、読み手を絶望的な気持ちにさせる。父親は完全に不在で、男性は、無責任か、性格が弱く、飲酒に走るかのどちらか。母親は子供をエゴイスティックに溺愛し、気まぐれに怒鳴りつける。成長して娘は母親そっくりになり、息子は飲んだくれて、誰もが貧困にあえいでいる。アンナ自身が、自己犠牲的に家庭を維持しようとする傲慢さがとっくに家庭を崩壊させているのに、本人だけが気付いていない。歪んだ母子関係の再生産。

・アレクサンドラ・マリーニナ（1957-）「カメンスカヤ」シリーズ（1993年～）²³

モスクワ市警の女性捜査官アナスタシヤ・カメンスカヤが、難事件を解決していく人気シリーズ。主人公は、仕事熱心で、その道のプロである。一方で家事は全くできず、献身的に支える男性が必要。家庭の仕事は完全に放棄し、努力すらしめない。身なりにも構わず、せっかくの美貌も台無しである。すべてにおいて理想的であろうというメンタリティはない。

・ワレーリヤ・ナールビコワ（1958-）『ざわめきのささやき』（1997）²⁴

ナールビコワは、男女の三角関係を都会的な軽快さで、エロティックに語る。1988年のデビュー当時はそれが新鮮で、「スカートをはいたマルキ・ド・サド」とも呼ばれた。

→仕事や家庭での自己実現よりも、性的自由が希求されている。ただし、セクシュアルな行為やものがごとが直接描かれるわけではなく、性行為を言葉に昇華したエロティックな文体が特徴。文学的レミニッセンスや言葉遊びを多用する実験的な文体で、ガートルード・スタインのポストモダン・バージョンと言える。

²² リュドミーラ・ペトルシェフスカヤ（吉岡ゆき訳）『時は夜』、群像社、1994年。

²³ アレクサンドラ・マリーニナ（吉岡ゆき訳）『盗まれた夢』、作品社、1999年。

²⁴ ワレーリヤ・ナールビコワ（吉岡ゆき訳）『ざわめきのささやき』群像社、1997年。

・リュドミーラ・ウリツカヤ (1943-) 『少女たち』 (2002) ²⁵

『少女たち』は戦中に生まれた双子の少女とその同級生をめぐる短編集。1950年代スターリン時代の末期の時代の、学校やアパートを舞台に、少女たちの日常生活がたんと話られる。ウリツカヤの小説は主にソ連時代が舞台で、イデオロギーとは無縁に生きるマージナルな人々の日常生活を、情緒豊かに描くことが特徴。この短編集も同様で、少女のみずみずしい感性に映るソ連時代の生活は、差別に苦しみ、不条理で、暗いのに、ノスタルジックでもある。しかし、貧困家庭の少女が豊かな家庭に遊びに行き、生活レベルに驚いたり、ユダヤ人の少女が差別の中で感じる孤独、少女たちのリアルな出産ごっこなどは、ステレオタイプなスターリン時代のイメージを打ち破る。

参考資料Ⅱ：ロシアの女性の歴史²⁶

19世紀：上流階級を中心に女子の中・高等教育機関誕生。1960年代婦人解放運動

→教育を受けても、活躍できる場が少ない

→文学・ジャーナリズムに参入。

20世紀初頭（革命前）：都市への人口流入（女性は低賃金の家事労働・工場労働に従事）

→文学の大衆化と性的主題への関心

→女性作家による新しいタイプの女性主人公の誕生。性的不平等への抗議と新しい生き方の模索→女性の解放・平等が体制打破の目標の一つ

・リジヤ・ジノヴィエワ=アンニバル 『33のできそこない』 (1907)

・アナスタシヤ・ヴェルビツカヤ 『幸福の鍵』 (1909-13)

・エフドキーヤ・ナグロツカヤ 『ディオニュソスの憤怒』 (1910)

ソヴィエト初期（～1920年代）：「家族死滅」イデオロギー

婚姻が教会法から分離、世俗化。離婚の容易化。相続制度廃止。妊娠中絶の合法化。事実婚主義。家事労働の社会化、生活サービス部門の充実が構想される。

→理念としては個人の解放。しかし経済的困難の中で、売春、離婚増加、浮浪児増加、妊娠中絶増加など社会的混乱を招く。

1930年代：急激な都市化・工業化→女性の社会労働の増加→生活スタイルの変化

人々は規律優先の行動様式の習得し、国家に面と向かって逆らわずにやりすごす生活スタ

²⁵ リュドミーラ・ウリツカヤ (沼野恭子訳) 『それぞれの少女時代』 群像社、2006年。

²⁶ 以下の文献を参照した。塩川伸明「ソ連史におけるジェンダーと家族」、和田春樹編『世界歴史大系ロシア史3：20世紀』山川出版社、1997年、481-491頁。関啓子「女性の自立と子育て」坂内徳明ほか編『ロシア：聖とカオス』彩流社、1995年、382-406頁。関啓子「民衆の生活世界と教育：ソヴィエト・ロシア教育史再考」『一橋論叢』114(3)、543-559

イルを身につける。同時に、身近な共同体的関係の中で、政治的な揶揄をしたり、パロディを楽しむことで精神的な自由を確保。

※課題であるはずの女性の家事労働軽減は行われず、女性は社会的労働・家事労働を二重に負担（家族強化論、母性讃美の傾向）。女性自身も家族重視の価値観を強化。

第二次世界大戦期（1940年代後半）：銃後を女性が支える。労働人口に占める女性の比率は1940年39%から1945年56%へ。重肉体労働・管理職にも進出。²⁷ そのほか諸外国に見られない現象として、女性兵士の存在があげられる。前線だけでも80万人の女性が志願し、多くは衛生・通信関連の任務にあたったが、飛行兵・狙撃兵・工兵など戦闘で活躍した。²⁸

戦後期：男性の復員により、一事女性の比率は減少1955年46%となったが、その後ゆるやかに上昇し、70年代以降51%を維持。²⁹

1960～70年代：高学歴、非身体労働のインテリ層が増加→都市に「新中間層」形成

「新中間層」：学歴インフレにより学歴に相応しい職業につけない、党組織に食い込まなければ自己実現できないことへの不満をもつ。よってノーメンクラトゥーラに厳しい敵意をもつ。権威主義的な公式イデオロギーに与することをよしとせず、価値観の多様性や個性を重視。

1980～90年代：ペレストロイカ、ソ連の崩壊により、自由な経済・社会・文化活動が可能になる。他方で社会福祉制度が崩壊、高齢女性の貧困化、女性の失業など弱者にしわ寄せ。格差が生じる。

²⁷ 塩川「ソ連史におけるジェンダーと家族」、484頁。

²⁸ スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ（三浦みどり訳）『戦争は女の顔をしていない』群像社、2008年。

²⁹ 同上、487頁。